

果についてもあわせて報告する。

5. 骨シンチグラフィが有用であった横紋筋融解症の 1 例

坂田 博道 小野 庸 (福岡大・放)

骨シンチグラフィが有用であった横紋筋融解症の 1 例を経験したので報告する。

症例は 65 歳、男性。8 年前より日本酒を昼間から 4~5 合/日飲んでいて、昭和 62 年 6 月初め梯子から転落し腰背部を打撲し、6 月 13 日下痢、けいれん発作、構語障害、乏尿が出現し、腎不全で当院へ入院した。入院時尿量 30 ml/日、BUN 35.1, Crea 3.6, CPK 11,382, 血中ミオグロビン 3,600 と高値で、横紋筋融解症による急性腎不全と診断され透析が開始された。 $^{99m}\text{Tc-DTPA}$ レノグラムは両腎とも無機能型を示し、GFR は 16 ml/min であった。XCT では腰背部筋に low density と high density が混在していた。 $^{99m}\text{Tc-HMDP}$ による骨シンチでは腰背部、大腿部、両側上肢に著明な集積がみられ、横紋筋融解症の障害部位の診断に有用であった。

6. 神経性食欲不振症の唾液腺機能の評価

—その方法に関して—

岩下 慎二 中條 政敏 中別府良昭
田之上供明 篠原 慎治 (鹿児島大・放)
真辺 豊 野添 新一 (同・一内)

神経性食欲不振症 (A.N.) 患者の唾液腺機能の評価する上で、唾液腺シンチにおける食物刺激の有用性を検討した。 $^{99m}\text{TcO}_4^-$ 370 MBq 静注後 1 F/分で 60 分間データを収集し、右耳下腺および顎下腺に ROI をもうけ TAC を作製した。対象は加療前 AN 17 例で A 群 (N=5) は、60 分目にクエン酸のみ投与し、B 群 (N=12) は 10, 20, 30, 40 分目にそれぞれカステラ、梅干の順に想像、視覚刺激を加え 50 分目にクエン酸負荷を行った。TAC 上食物刺激では刺激開始直前と開始 6 分目までのうち、クエン酸負荷では投与直前と 3 分目の activity の最大差を求め比較した。耳下腺では視覚刺激で顎下腺では全刺激で両群間に有意差 ($p < 0.05$) を認め食物刺激の有用性が認められた。

7. 肝腫瘍に対する dynamic ^{18}F FDG-PET

田原 隆 一矢 有一 桑原 康雄
大塚 誠 福村 利光 増田 康治
(九州大・放)

肝腫瘍 13 例 18 病巣 (肝細胞癌 7 例 7 病巣, 胆管細胞癌 2 例 2 病巣, 食道癌肝転移 2 例 7 病巣, 肝血管腫 2 例 2 病巣) に対し dynamic ^{18}F FDG-PET を行い、肝腫瘍の質的診断の可能性について検討した。PET 装置は島津製 HEADTOME III を用い、 ^{18}F FDG 74-296 MBq (2-8 mCi) を 1 分間かけて静注し、静注 60 分後までデータ収集を行った。その結果、肝細胞癌、肝血管腫においては静注後 10-40 分における集積増加率は負の値を示し、時間とともに集積が減少したが、胆管細胞癌、食道癌肝転移では、逆に増加した。腫瘍/非腫瘍部肝集積比 (静注後 45-60 分) は食道癌肝転移、胆管細胞癌、肝血管腫、肝細胞癌の順に高かった。以上より、腫瘍の組織型により ^{18}F FDG の集積に差があることが示唆された。

8. 慢性腎不全による貧血患者のエリスロポイエチン投与前後の脳循環、代謝—PET による検討—

大塚 誠 一矢 有一 桑原 康雄
田原 隆 福村 利光 増田 康治
(九州大・放)
平方 秀樹 (同・二内)

慢性腎不全による長期透析患者にエリスロポイエチンを投与することにより貧血が改善された。その際みられた脳血流量 (CBF)、酸素消費量 (CMRO_2) および酸素摂取率 (OEF) の変化を PET により投与前後に測定した。対象は平均年齢 51 歳、平均透析年数 8.4 年の 5 例で、全例週 3 回各 5 時間の透析を受けており、脳内病変は認めていない。エリスロポイエチン 1,500 U を週 3 回、3 か月間投与した。ヘマトクリットは $18 \pm 2\%$ (mean \pm SD) から 27 ± 2 へと上昇し、それに伴って、CBF は 40 ± 6 ml/min/100ml から 32 ± 2 へと、OEF は $49 \pm 2\%$ から 42 ± 1 へと低下したが、 CMRO_2 は 1.5 ± 0.2 ml/min/100 ml から 1.6 ± 0.1 と維持されていた。